

いい時も悪い時も

ふじわらまさかず
藤原正和

私は今、社会人として働きつつ、会社の陸上競技部に所属し活動している。幼少時から特別足が速いわけではなかったが、ここまで続けてこられたのも周りの支えがあったからだと感謝している。

私は、大学卒業前に初めてフルマラソンを走った。結果は良く、パリ世界陸上の日本代表に選ばれた。日本代表になることは、ずっと夢であったし、本当にうれしかった。大学卒業後、今の会社に入社し、社会人としてのスタートをきったが、そこには大きな挫折が待っていた。世界選手権の一カ月前に足を痛め、だまじだまじやっていたが、結局、スタートラインに立つことができなかった。会社はもちろん、地元の方々や、期待していただきた方々の期待を裏切り、帰国することとなった。

帰国してから一番辛かったことは、今まで応援してくれていると思っていた人たちが離れていくことだった。てのひらを返したように接する人を見ると、自分自身に本当の力がなく、人としての中身が足りなかったのだと痛感させられた。それと同時に、人を恨む気持ちが芽生えたのも事実だ。人間不信にもなった。人を信じられなくなった自分自身にもまた嫌気がさした。自分だってそういう人を利用しようと考えていたのではないか。そんなさもしさが招いた結果なのではないかと反省させられた。

いい時には人が自然と寄ってくるもので、悪い時には当然離れていく。悪い時にも応援し、支えてくれる人こそ本当に信じられる人だと気づいた。つまるところ、どれだけ頼られる人間性をつくれるか。信じてもらえる行動を普段からとれるか。そして、どれだけ相手を信じられるかだ。

では、どんな人なら信じられるだろう。私はこう思う。基本的なあいさつや礼儀をわきまえている人、いい時には人が自然と寄ってくるもので、悪い時には当然離れていく。悪い時にも応援し、支えてくれる人こそ本当に信じられる人だと気づいた。つまるところ、どれだけ頼られる人間性をつくれるか。信じてもらえる行動を普段からとれるか。そして、どれだけ相手を信じられるかだ。

二〇一〇年二月、私は東京マラソンで優勝し、ようやく表舞台に帰ってこられた。パリ世界陸上の欠場から六年が経っていた。長い時間がかかってしまったが、我慢強く支えてくださった周りの応援があればこそだと思っている。思うように走れなかった時間は決して無駄ではなかった。それをこれからの試合で、生き方で、証明していきたい。なぜなら自分が変わったからだ。過去は変えられないが、未来は変えることができる。すべては気のもちようだ。これを読んでくださったみなさんの未来も、きっと変えられる。



藤原正和



ふじわらまさかず

昭和五十六（一九八一）年生まれ 神河町出身
長距離走選手。大学時代は三大駅伝にすべて出場、箱根駅伝では区間賞および往路優勝を果たす。二〇一〇年東京マラソンで、マラソン三度目の挑戦にして初優勝を飾った。